
アンドラハルの魔王

J. I. A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンドラハルの魔王

【Nコード】

N6103Z

【作者名】

J・I・A

【あらすじ】

魔法文明がまだ未発達な異世界。天空城にて最終決戦を控え、勇者の仲間達は千里眼ですべてを見てきた妖精を中心に過去を振り返る。

エピローグ 天空城にて

五一三年、天空城がまだアーディナルの空を飛んでいた時代。王の間を目前にして、廊下に座り込みをする者達がいた。

お互いに顔を見ようともせず、ただ黙って時が来るのを待っていた。

剣豪サージードノヴァンはいらついた様子で、さきほどから剣の鍔をもてあそんでいる。

王の間で戦いが始まれば、すぐにでも飛び込むつもりだった。

「とうとう、この時が来ちゃったな……」

「ああ……」

彼の声に応えたのはアツカ、西部のバーリヤ平原からやってきた狼族の戦士だ。

人前では帽子を目深に被って獣の耳を隠しているが、ときおり口の端をつり上げて異様に発達した犬歯を見せる癖がある。魔法は使えない。

「この戦いで全てが終わる。魔界が滅びるか、人界が滅びるか」「しかし、本当にこれで全てが終わるのか？」

口を挟んだのは賢者オルフェウスだった。

卓越した魔法の使い手だが、この中で最も若年と言って過言ではない。体に合わない大きな魔法の杖を抱え、常に最大の力が出せるよう、魔力を温存している。

「僕にはとてもそうは思えないんだが……」

「オルフェウス、迷ってはいけないわ」

女剣士イーラは落ち着いて彼を諫めた。

普通の男性よりも体躯の大きな彼女は、サージよりも大きな超巨剣の使い手だ。剣と呼ぶのも憚れる建物の柱のような武器を、今は椅子代わりにしている。

「目の前にこの城の主が居る、この城はイーサファルトを目指して、今もなお人界の上空を飛びつづけている。このまま行けば間違いなく戦争になる、私たちはそれを阻止しなければならない。いま私たちが考えていいのは、ただそれだけよ」

「分かっちゃ居るけどさ……」

「あ……あ……あの……みな……みな……さん……」

おどおどしながら、ようやく声を挟むことができたのは尼僧のサーラだ。

ゆったりした西部の民族衣装を着ていて、髪飾りを頭が重くなりそうなほどたくさんつけている。彼女は治癒の力を司る水の精霊ゼテンを信仰しており、多少ではあるが治癒魔法が使えた。

「わた……しは……その……あの……ひと……が……まさか……あの……ひと……だって……たくさん……助けて……くれたし……わたし……魔法……へた……だけど……あのひと……上手……
なんで……なんで……あのひと……今は……敵……よく……よく……わからなくて……」

サーラはうまく言葉に出来なかったらしく、結局黙ってしまった。沈黙を破るように、アツカは言った。

「ゲールハーツが言ったことには……」

「やめるんだ、アツカ！」

サージは立ち上がって彼を怒鳴りつけた。サーラは泣きそうになって耳をふさいだ。

「もう死んだ奴の事をいちいち気にするな！ あいつは死んだ、これからこのパーティがどの道をたどるかは、残された俺たちが決めることだ！ ミュン！ ……おい、ミュン！」

ただひとり、知らない顔をして窓の外を眺めていた女性が居た。森の管理者サテモのミュンⅡアシケンだ。彼女のとがった耳は遙か遠くの出来事を聞き、目の前の出来事のように知ることが出来る、《良き耳》と呼ばれる耳だ。

「お前なら、何か知ってるはずだろう……お願いだ、教えてくれ、あいつは、本当に魔王だったのか……！ どうして俺たちを助けたんだ……！ ただ味方のふりをして俺たちに取り入って、体よく利用していただけだったのか……！」

ミュンは、長い耳をぴくぴくと動かして、困ったように首をかしげた。

「その質問に答えるのは難しいわ」

「そんな筈はないだろう……！ お前は全てを見て知っているはずだ！」

「サージ、私にはこの戦いそのものが複雑すぎてわからないの。一体誰が魔王で、誰が勇者だったのか。私には魔王は何人もいたような気がするし、勇者だって何人もいたような気がするわ。そもそも魔王とは何なの？ 勇者とは何なの？」

ミュンの回答に、一同は息を呑んだ。サージはむしろ怒りさえし

た。

「ふざけんな……！ 決まっている、魔族の王が魔王！ 魔族を束ねる者だ！ そして人間に害悪をなすそいつを征伐する代表が勇者だ、お前はそれを今まで知らずに戦ってたのかよ……！」

憤慨する彼に対して、どうして怒りを買ってしまったのか、という複雑な面持ちをするミュンに、オルフェウスは優しく諭した。

「ミュン……今の私たちに必要なのは、サテモの哲学的な話じゃないんだ。彼が我々の敵だったのか、味方だったのかという、すごく単純な話だ」

「敵だったかもしれないし、味方だったかもしれない。どちらにもなれたかもしれない……最初からそうなるように決まっていたのかもしれない。……結果として彼は魔王で、彼女は勇者になってしまったわけですが」

ミュンの不思議な回答に、とうとうオルフェウスも困惑するような顔つきになってしまった。

答えがいつこうに手に入らず、いったいどうしたものかと顔を見合わせる英雄達の間で、ミュンはふんと息を漏らした。

「単純に言い表すには、この戦いは複雑すぎるようです……なら、順を追って話しましょう、私たちと巡り会うより少し前の、《魔王ミュシャ》と《勇者エーサ》について」

勇者エーサ

——二年前、イーサファルト王国、ホルへ高原、公爵の城。

ゲールハーツは頬をしきりにかいていた。目の前に少女が居る。黒髪に黒い瞳、体は男物の鎧を着こなせるほど大きい、しかし、肌は触ると溶けそうなほど白い。

この少女に、勇者にふさわしい剣の手ほどきをするのが彼の役割である。

「エーサさま、そう何度も何度もお城を抜け出されてはこまります……ヘグニ公にお役目を仰せつかった私どもを困らせないでください」

少女は、つーんとそっぽを向いた。

「礼儀作法の授業にはちゃんと出ておりまする」

「それで礼儀作法が身についていないのではお話にならないではありませんか」しかも語尾が微妙に変だ。

「失敬な、国語の授業にも、教養の授業にも、魔法の授業にも、ちゃんと出ておりまする」

「ちゃんと出ていないの私の授業だけですか……」

ゲールハーツはぷるぷると拳をふるわせた。いったいどういう意味だ。

教える立場の彼も年のころはさほど少女と変わらないので、ひよっとすると彼だけ舐められているのかもしれない。

ゲールハーツはまだ二十代前半の青年である。七年前に元服し、

アルト公爵に仕える一介の正騎士という身分になった。

いままで何人か新人の剣術指南を受け持ったことはあるが、彼女には優秀な新人になくってはならない「やる気」がない。

まるで精神修養のために嫌々騎士にさせられた貴族のぼっちゃんさながら、やらされている感が見え透いていた。アーディナル中部では伝統的に若い頃に騎士見習いをする家系が多く、ゲールハーツもそういった新人を受け持ったことがある。

「エーサさま、あなたはご自分がいったい何者であるかという自覚が足りません。あなたは何者ですか？」

「我が名はエーサ！ ドラゴン・ライダーの赤い星に導かれ、異世界より現れた勇者だ！ アンドラハルの魔王を討伐し、この世に更なる光をもたらす救国の英雄である！」

「英雄である！（キリッ、じゃありません。それでは用意された台詞をただなぞっているだけではありませんか！ そうではありません、ご自分の言葉でおっしゃってください、あなたは何者ですか？」

「我が名はエーサ！ ……」

反射的に言ってしまったエーサは、はっとしてしばらく固まっていた。どうやら続く言葉がでなかったらしく、ふいに涙目になった。

「……ううう、だって、これを覚えなければご飯が食べられなかったんであります……」

はっ、そうか、授業をサボったら、ご飯ぬきにすればいいのかとゲールハーツは一瞬感心してしまっただが、相手は救国の勇者だ、一介の家庭教師にご飯抜きなどという強権が発動できるはずもない。ここはあえなく断念した。

しかし……驚くべき記憶力だ。

ドラゴン・ライダーの赤い星が最後に出現し、北の遺跡で彼女が

発見されたのがつい三ヶ月前。ヘグニ公爵によれば、そのとき勇者はこの世界の言葉をまるで話せなかったという。

伝説の勇者を見つけたことを、王にはすでに報告してしまった……なんとか王に会わせられるぐらいには教養をたたき込まねば、ということでは彼らが家庭教師として公爵領に招かれ、朝から晩までみっちり徹底的に教育を施しているのである。

この短期間で言語は不自由なくらい習得してしまったし、これだけの長台詞をすらすらと暗記してしまったのはさすがだ。魔法使いに向いているかもしれない、きっと呪文を覚えるのも容易だろう。

「ゲールハーツ、もし王からそういう質問があったら、私はどうすればいいのでありましょうか？」

「素直におっしゃったらどうです？ 元いた世界の事でも」

「私は元居た世界の記憶を忘れてしまったのであります……なにも覚えていない、気がついたら遺跡に倒れていた……」

エーサの声は、すこし震えていた。

「私はどうすればいいのでありましょうか？ 本当は自分が何者で、どこから来たのか、本当に勇者であるかどうか分からないのであります……」

ゲールハーツは、エーサの肩をがっしと掴んだ。

薄い灰色の瞳を持つ彼が生涯見たこともない、漆黒の瞳をまっすぐ見ると、まるで瞳の中に吸い込まれそうだった。

「エーサさま、あなたは勇者です。そして我々の希望です。……我々にはあなたをお守りする義務がある、そしてあなたにはその献身に報いる義務がある、それが信頼というものです」

「わたくしには良くわからないであります……」

「分からなくても結構です。授業をお休みになるときは、遠慮なさらずに私におっしゃってください。急にいなくなつて、下々の者達をむやみに不安にさせるようなことだけは、おやめになってください、それは勇者のすることではございません。あなたは我々の希望なのですから。いいですね？」

唇をとがせたり、きゅっと結んだり、エーサの心の中は色々と忙しそうだった。

ようやく、おそろおそろと言った風に声を出した。

「ゲールハーツ……今日は休んじゃダメ？」

「今日はもうお疲れですか？」

「ううん、これから薬草摘みに行くのであります」

「いいでしょう。あまり遠くへ行かないように。それと基礎練（素振り三千回、ダッシュ五千回、腹筋背筋二千回）だけでもやっていてくださいね」

「やってられるかー！」

エーサはつかつとなつて鋭いまわし蹴りを放った。彼女は鎧を身にまとい、脛にまともに当たった威力は強烈だった。ゲールハーツが悶えている間に、勇者はその場から逃げ出した。

「きよ、今日は用事があるから休むのでありますー！ これにてー！」

「ま、待ってください！ 《伝説の勇者様》には軽いメニューでしょう……？ 一体、どうしてそんなに嫌がるんですか……！」

ゲールハーツの中の勇者基準は、とてつもなく高かった。

それがエーサにとって重荷だったのは言うまでもないが、それだけエーサは期待されていたということだ。

それが《勇者エーサ》だった。

魔王ミュシャ

ミュシャは一枚のカードを天井に掲げ、そこに書かれた魔法文字をにらみつけた。

ウェン（X）、Wの発音を表す。闇の精霊ルージャ（LWG）の第二文字で、あまり縁起のいい単語を連想しない。

雪、消滅、減衰、減少。

そのなかで彼の未来を表す最も適当な言葉は、『消滅』だろう。彼は残ったカードを放り投げて、ソファに仰向けになった。

「……参った」

このままではいずれ、彼も本当に消滅しかねない。

「ミュシャさまー、ミューシャーさまー」

ドアが無遠慮にがんごん叩かれて、ミュシャは眠りにつこうとしていた眼を不機嫌そうに開いた。

長い白髪、瘦身。ワイシャツを着崩し、瞳はエメラルドの緑色にも海の青色にもみえた。

「ミュシャさまー、そこに居るのはわかっておりまするー、ご自分では外に出ることの出来ない引きこもりの大魔法使いミュシャさまー、エーサが参りましたよー、お返事なさってくださいー」

ああもう、とため息をついて立ち上がった。

いちいち煩い奴だ。

ドアを開くと、葉草を両手一杯に抱え、満面の笑みを浮かべた少女がいた。

「薬草とって参りましたよー」

ミュシャは複雑な面持ちで少女を眺めた。

顔は多少汚れていて、擦り傷もできている。

逃亡中の身である今の自分は、薬草を採りに外に出ることすら出来なかった。

こんな少女に頼らなければ生きていけない現実には、情けない思いをする。

「薬……」

「はい？」

「薬をやる、上がれ」

「はいっ」

ミュシャは薬草をひとつひとつ分別すると、水につけて汚れを落とし、大きな鍋の中で湯がいた。

彼がこの空き家に転がり込んでから三ヶ月が経つが、ここに訪れるものはこの変わり者の少女か、さもなくば行方不明になった彼女を捜索している城の兵士だった。

むろん、ミュシャは今まで城の兵士に彼女を差し出したりはしていない。そんなことをして目をつけられたら余計に困るからだ。

屋敷中にあふれている魔法の装飾品や実験道具の類いから見て、どうやら高名な魔法使いの家であることは間違いない。

だが、いまはその主が不在である。ミュシャが待てども待てども、いっこうに訪れる気配はなかった。

——死んだのか？

ミュシャは時にそうつぶやく。空っぽの屋敷に響いた声は、やたらと真実味を帯びている気がする。

けつきよく彼はこの少女に頼らざるを得なかった。

ポジション
回復薬が完成するまでの間、エーサはおとなしくテーブルの席で待っていた。

「次の材料だが……」

ミュシャは本棚にぎっしり詰まった本のなかから、一冊を選んでそれを彼女の前に広げてみせた。

分厚い魔道書は複数のページに何百もの葉がはさまれ、深海魚のヒレのようになっていた。

「これだ、『偽りの金塊』と『お化けネズミの爪』。これが必要だ」

このぐらいならすぐに手に入るだろう、と思われるものだった。

エーサはテーブルに身を乗り出して、じいっと魔道書をのぞき込んだ。

黒髪がふわりと鼻をくすぐって、ミュシャは彼女が毎日体を清潔に保っている事を知る。

「これを持ってくれば、よろしいのでありまするか」

「そうだ」

「ミュシャさま、これは一体なんの材料になるのでござりまするか？」

ミュシャはほんの一瞬だけ答えにつまったが、うろたえる素振りもみせずに即答した。

「秘密だ」

「ミュシャさまのクエストはいつも謎が多いのであります……」

「お前こそ、どうしてそう頻繁に回復薬^{ポーション}をほしがる？」

「剣のお稽古が厳しいのでござりまする……」

エーサはため息混じりに言った。

「特に先生が『伝説の勇者さまならこのくらい出来て当然でしょー』なんて言って、無理難題を押しつけてくるのであります……ミュシャさまの回復薬^{ポーション}がなければ、とつくに死んでいる身なのであります」

「ひどい話だ」

ミュシャは眉をしかめた。

彼女が伝説の勇者であるという話は、出会ったときに聞いている。「それはいつたい、どういう伝説なのか？」という問いに対し、エーサが町に出かけて話を聞いて回った結果、

「はい、どうやらこの国には偉い予言者さまが居て、その予言者さまが予言を残されたそうなのです。『次に空に赤い星が出現したときに、その星の出ている方向から三人の賢者さまが一人のお客さまを連れてくる、そのお客様が魔界を征服する伝説の勇者さまだ』と言われていたそうです」

という情報入手して戻ってきた。

はからずも、ミュシャが彼女にあたえた最初のクエストとなった。

「……最近、あまり自信がないのであります」

鍋はくつつつと煮たっていた。

頃合いを見計らって、ミュシャは席を立った。どろどろになった薬草に少量の光の石の粉をまぶし、失われた魔力を補完する。そし

てそのまま瓶に摘めていった。

「なぜだ。お前はまさにその『三人の賢者が連れて帰った客人』なのだろう？」

予言にある赤い星は、出現から三ヶ月が経った今なお、同じ方角に輝き続けている。

この町から見て南方、そこには見捨てられた古代遺跡があるだけだ。さらに南に行けば広大な魔界が広がっている。

エーサはそこでふらふらしている所を発見されたという。ヘグニ公爵の遣わした三人の賢者が彼女を連れて帰ったらしい。

「間違いないのであります。けど、戦うのが嫌なのであります。剣を見ると、恐くて震えてしまうのであります」

「臆病な勇者というわけか」

「で、でも、魔法なら大丈夫なのであります！　きっと私は剣より魔法の方が得意な勇者になるのであります！」

エーサはがたと椅子から立ち上がった。ミュシャは怖気がするほどの長身で、かなり背丈の高いエーサが彼を見上げなければならなかった。

「ミュシャさま、よろしければ、その、エーサに魔法をご教授ねがいますか？」

「ま、魔法を……？」

なぜかミュシャはすぐに返答できなかった。

「……無理だ」

「なぜでありますか？　お願いであります、大魔法使いのミュシ

やさま。生まれて初めて使った基礎魔法で火の玉を生み出したら、町をひとつ消し飛ばしてしまったことのあるミュシャさま！」

「お前はそういう記憶力は抜群だな……答える必要は無い、ただ教えられないだけだ」

エーサが、むーっと膨れていると、ミュシャは回復薬のポーション入った瓶を押しつけるように渡した。

「薬はやる。今日の分だ、持って帰れ」

「帰りたくありませんぬ」

「どうした」

「……塗って欲しいのでありまする」

顎をついとあげ、せがむように彼を見上げた。

ミュシャは瓶のコルク栓を抜くと、油っこい液体を指につけ、真っ白い額に軽く塗りつけた。

一瞬ひるんだように眼を閉じるエーサに、立て続けに頬や顎に塗りつけていった。

擦り傷はしゅうつと音を立てて消えたが、まだ彼女はむすつとしている。

「クエストに成功したら、また塗って欲しいのでありまする」

「唯のただっ子だな、勇者は」

「『《偽りの金塊》？』」

相談を受けたゲールハーツは、その内容に眼を見張った。

エーサはいたってまじめだったが、かえって彼は困惑した。

「どうして、そんなものが欲しいのですか？ 普通の金塊より価値は数段劣りますし……長く持っているを持ち物を腐食させる力があるって、食糧や装備が劣化していくと言われていきます……」

「今すぐ欲しいのであります。ゲールハーツ、なんとか手に入らないでありますか？」

「そんなもの、普通は売っていませんよ。コボルトがたまに落としますが、冒険者だって大抵はその場に捨てていきますから……そう、それでコボルトの出現する洞窟に落ちていたりして、冒険者が通っていたことが分かったりしますね」

「コボルトの洞窟……」

彼の言葉にヒントを得たらしい、エーサはなにやら口の中でぶつぶつ呟いていた。

ゲールハーツに理由は分からないが、彼女はどうかやらのアイテムがどうしても気になるらしい。

やがて彼ははっとひらめいた。

そうだ、これだ。これは利用しない手はない。

「エーサさま、次の稽古は、お休みで構いませんよ」

ゲールハーツは思い切って言った。エーサはため息をついた。

「また？ けどけっきょく基礎練はしなくちゃならないんでしょう？」

「いいえ、基礎練はいつもの半分で構いません、時間がもったないのですからね。……次回からはいいよいよ実戦です、公に許可をもらって、コボルトの洞窟に行きましょう！」

その男がどうして人界にいたのか定かではない。

しかし、決戦の日まで様々な形で勇者と関わりあっていたのは確か
なようだ。

少なくとも、エーサが魔界を制圧する勇者になるまで成長してゆ
く上で欠かせない、重大な人物であつたはずだ。

それが魔王ミュシャだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6103z/>

アンドラハルの魔王

2011年12月21日10時53分発行